

令和3年5月15日  
北関東フォーラム  
於：シムックス

中齋塾 北関東フォーラム  
令和3年度 第5回

君子は信ぜられて後に其の民を勞す

皆さん、おはようございます。今日は70分の短縮の講話ですので、早速レジюмеに従って論語の素読から参ります。

【十】子夏 曰く、君子は信ぜられて後に其の民を勞す。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を厲しむと為す。信ぜられて後に諫む。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を謗ると為す。

子夏は孔子より44歳年下の若いお弟子さんです。ですからお年寄りとお若者の会話と考えればよいでしょう。

レジюмеに書いた通り今の時代に置き換えて、自分は人から信頼されているかどうか考えてみて下さい。自分のことを心の底から信頼してくれる人が、最低一人はいる方？・・・結構手が挙がりました。では、10人くらいはいるという方は如何でしょう？・・・さすがにハードルが高すぎますね。

家庭で考えると、一家の大黒柱を信じるのが普通だと思いますが、世の中を見るとそうでもない事が多い。最近では、子供が親を殺し、親が子供を殺すような事件が普通に起きるようになりました。どうしてこんなことになってしまったのかと思います。

以前、マヤ文明が知りたくてメキシコに出かけたことがあります。そして、先住民の部族長が日本人と会話をしている話を聞いたことがあります。親が子供を殺す、子供が親を殺すような部族は滅びる。親が子供を殺すなど、あってはならない。それが当たり前になってきているのなら、日本民族はそう長くはないだろう・・・というような会話だったと思います。もちろん今年や来年で滅びるという話ではなくて、100年200年単位の話です。

果たして100年後、200年後に日本人が生存しているかどうか。これについては、学者の先生方が色々な角度から研究をしています。以前、中齋塾フォーラム顧問の木内孝さんが、「100年後、人類が生き残っている確立はどれくらいか」という質問を世界の科学者に投げかけたことがあります。返ってきた答えは、「フィフティ・フィフティ」だったそうです。ほんのちょっとした要因で人類は滅亡するし、逆にちょっとした要因がプラスに働けば生存が可能であろうというのが科学者の知見です。知見とは、自らの知識をもって見識を語

るということです。

脱線になりますが、「知識・見識・胆識」という言葉があります。この言葉は、安岡正篤先生が詳しく解説をされています。

知識について、本日はご紹介する本『わたしの人生観・歴史観』（PHP研究所）の中で著者の渡部昇一さんは、知識には二種類あると言っておられます。

一つは、現実役に立つ知識です。これはインターネットで調べれば答えがすぐに出てくるような知識です。例えば、今朝も山崎先生に棒術の指導をして戴きましたが、棒術を習う時には、最初に技術的なことを教わります。どうやって身体を動かせばよいか、棒はどのように扱うか、これは知識の段階で扱えるようになります。剣道も同じだと思います。知識がなければ棒が扱えない。そういう場合の知識です。

もう一つの知識は、人生を豊かにする上で自分自身を磨く知識、自分自身を作り上げていくような知識です。

どちらがどうとは言えません。ただ、知識には二通りあるのだと渡部昇一さんは教えてくれています。

他の紹介書籍も一緒に回覧致します。いずれも渡部昇一さんの書かれたもので、『「南洲翁遺訓」を読む』（致知出版社）と、何度かご紹介している『税高くして国亡ぶ』（ワック出版）です。

では、「知識・見識・胆識」は何か。

「知識」は、今申し上げた自分自身を磨く知識であったり、横の学問で身に付ける色々な技術的な知識です。今、あちらこちらで天変地異が起きていますが、地震や津波が来たらどうすべきか、コロナにかかったらどう動くべきか、災害が起きたらどうするか・・・これらはインターネット等で調べようと思えば調べられる知識です。そのように即座に役に立つ知識が、「知識」だと捉えればよいでしょう。

「見識」は、コロナにかかったらどういう動きをすればよいか知識として頭にあったとしても、実際に自分がかかったと思った時には頭が真っ白になります。一つの例を申し上げます。先々月、シムックスの静岡営業所に懇談会で行きました。その日の朝、営業所の所長が発熱したという一報が入りました。新幹線で静岡に向かう間にどんどん情報が入って来ますので、その度ごとに対応を指示していました。幸いコロナではありませんでしたが、後で聞いてみると、発熱した本人も知識は沢山あるのです。落ち着いてものを考える時には、こうすればよいああすればよいと分かるのですが、自分がかかったと思った時は、も

しかすると死ぬかもしれないと思って頭が真っ白になってしまい、何をどうしてよいか分からなかったそうです。

ということで、単なる知識が知識のままだと手が打てません。そこに見識があれば、こうすべきだという判断が出来ます。その時は、まずPCR検査を受けるよう段取りを確認し、もし受けられなければ直ぐに抗原検査をするよう指示をしました。そして、「一動作一消毒」という標語を貼って、営業所の社員に徹底させるようにしました。

このように一つ一つやらなければならないものに対して、<この場合はこうすべきだ>という知識が肚にずっしり収まっている状態を「見識」と言います。肚に収まっていなければ、こうなさいという指示が出せません。何かあった時に頭が真っ白になった人に対して、こうなさいと言える。そういう知識まで高めたものが「見識」です。

「胆識」は、見識までは持っている人が、腹を括って自分の命をかけてでも実行する。自分の命がなくなったとしても、敢えて実行するというのはまず難しい。命がけで実行するという胆力がなければ、実行出来ません。先ほどご紹介した本に「南洲翁遺訓」がありますが、西郷隆盛が言った有名な台詞にこういうものがあります。

**命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。**

私欲も持たず国家のために命を懸ける人間でなければ大業は果たせるものか、ということでしょう。胆識とは、そういう肚をしっかり身体に沁み込ませた人間ということだと思います。

有名な西郷隆盛と勝海舟の江戸城明渡しは、胆識をもった人間同士が相見えて話をした結果、江戸を火の海にすることなく民を救い、各大名の命も救ったわけです。そこに胆力を持った人間がいなければ、そうはいかなかった。明治維新の時、血を流す者が圧倒的に少なかったのはなぜかという話が諸外国から出て来ますが、それは、彼らが縦の学問をしていたからです。縦の学問が脈々と伝わっていたから、明治維新を成功させたのだと言われています。

我々は中斎塾フォーラムで学んでいるわけですが、学問には縦の学問と横の学問があります。縦の学問は、哲学と歴史が主軸です。横の学問は、ありとあらゆる学問です。何でもよろしいから、どんどん横に広げていけばよいのです。自分がこれだと思ったものが横の学問として深まっていく。そして、横と縦が一体化した時に、知恵が生まれます。知恵が生まれたなら、あとは知識・見識・胆識と深めていけば良いのです。

では、論語に戻って解説を致します。

子夏が政治の任に就いた時に、孔子と話をした時の状況です。

**君子は信ぜられて後に其の民を勞す。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を厲しむと為す。**・・・君子は国民から信用されてはじめて、国民を使うことが出来る。信用されていなければ、国民は不利益を被ると思って言うことを聞くはずがない。

菅首相で考えます。菅さんが国民から信用されていれば、緊急事態宣言やワクチン接種も菅さんの言うことに従う。しかし言うことがコロコロ変わってしまっ信用できなければ、国民はそっぽを向く、と捉えます。

会社でも同じです。社長の言う事がコロコロ変わったり、役員の言う事と違っていれば、社員は信用しません。

**信ぜられて後に諫む。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を謗ると為す。**・・・君子は主君に信頼を得てはじめて、主君を諫める。信頼を得ていなければ、主君は悪口を言っていると思って聞く耳を持たない。

また菅さんの話でいきましょう。本当かどうか分かりませんが、官僚が持って来た資料を、菅さんが「話にならない」と言って投げつけたというニュースがネット等に流れています。そうすると官僚は凍り付いてしまっ、総理大臣が聞きたくないような情報は二度と出さなくなります。菅さんが官僚を信頼している、官僚も菅さんを信頼している、お互いがお互いを信用している状況であれば、官僚からアドバイスや諫言があっても、なるほどそうだと聞く耳を持つわけです。

会社で考えれば、社長がとんでもない仕事をとって来たとします。社長が信用されていなければ、社員は大赤字になるのではと思ってもやっってしまう。社長が社員と信頼関係があれば、社員はやめた方がよいと言えます。

しか いわ たいとく のり こ しょうとく しゅつにゆう か  
**【十一】子夏 曰く、大徳 閑を踰えずんば、小徳は 出入すとも可なり。**

子夏が言うには、大人物は基本的な道徳を無意識の内に守っているものだ。小人物は細々とした規則に口やかましいものだ。

これも政治家で考えます。大人物が組織の上に乗れば、下の官僚は結構思うように活動出来ます。ところが小人物が上に乗ってしまうと、官僚は息が詰まる。

官僚たちは一生懸命仕事をしますから、法律をどんどん細かくします。今、働き方改革が盛んに叫ばれています。法律を厳しくすればするほど、官僚が働けば働くほど、例えば8時始まりの会社であれば、8時ぴったりに会社に行きなさいということになります。社員が10分前に出社しているのが常態化していれば、年間でどれだけ超過勤務をしているか、そ

れに対して会社はきちんと給料を払わなければなりません。また、社員が働き過ぎていないかを調べて、会社から時間外手当を受け取る事を仲介する業者もあります。官僚が一生懸命仕事をすればするほど、そういう仕組みを作り出していると思っています。

レジュメに、「人を見る上で、素晴らしい人物は基本的な道徳は自然と守るものであり、小さな人物は細々とした規則に口やかましいものだ」と解説を書きました。これを逆にしたらどうでしょうか。規則を守れと口やかましい者が社長になったなら、社員はたまったものではない。上に立つ者が細かい事ばかり言っていたら、下の者はやっつけられない、とこの論語を受け止めるとよいでしょう。

### 疑問に思ったら追究する

以前、ワクチンの副反応についてお話しました。そして、何か気になることがあったら調べてみることをお勧めしました。そうしましたら今朝、青木幹事から良い質問がありました。三島中洲の漢詩「学を論ず」について、『陽明学のすすめVI』に「千秋易らざるは是れ彝倫 文物典章は世を追って新たなり」とあるが、詩吟の教本では、「文物典章は日を追うて新たなり」とある。どちらが正しいのですか・・・という質問でした。

私がかつて二松学舎大学で教わったのは「日を追うて新たなり」でした。詩吟の教室でも同じように詠んでいます。ところが調べてみると、三島中洲本人が書いた掛け軸に「世を追うて」とありました。『陽明学のすすめVI』に写真を載せてあります。

意味を解釈すると、

**千秋易らざるは是れ彝倫**・・・人間として守らねばならない基本的な道徳は、一千年経っても変わるものではない。

**文物典章は日を追うて新たなり**・・・世の中の規則（法律）は毎日毎日変わる。

となります。私はこの文章を読んでいておかしいと思いました。規則を毎日毎日変えていてはどうにもなりません。これは今まで教えてくれた先生の方が間違っているのではないかと、そう思って調べました。そうしましたら、古い資料に「世を追うて」と書いてあるものがありました。「世を追うて」の方が当たり前ではないかと考えて、色々当たっていった結果、それを裏付ける掛け軸が出て来たのです。本人は「世を追うて」と書いていた。それを後から解釈する学者が何かの加減で間違えて、それがそのまま伝わって、「日を追うて」に変わってしまったわけです。

ですから皆さんも、おかしいと思ったら徹底的に調べて下さい。調べたら、なるほどと思う結果が出てくるものです。

そこで、先ほどご紹介した渡部昇一さんの『南洲翁遺訓を読む』の話をご紹介します。渡部昇一さんは小さい頃に西郷南洲の作った漢詩を読んで、おかしいと思った。それは、「子孫に美田を残さず」という漢詩です。

### 感懐

**幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し 丈夫玉碎 輒全を愧ず**

**一家の遺事 人知るや否や 児孫の為に 美田を買わず**

なぜ西郷隆盛は子孫に財産を残さないと言ったのか、渡部昇一さんはずっとおかしいと思いつけていた。そしてこの本を書いたと言っておられます。小さい時に疑問を持ったものに対して、答えが出なければ一生涯疑問を持ち続けた。その結果、渡部昇一さんの物事を考えていく上での基本的な論理的思考が生まれたのだと私は思います。

渡部昇一さんが疑問に感じたものの一つに、税金があります。税金が何でこんなに高いのか・・・これについては、もう一冊の紹介書籍『税高くして国亡ぶ』に書いてあります。

人間には出会いがあって、色々な疑問を持った時にそれに対して答えてくれる人がいると、どんどん学問が深まります。渡部昇一さんの場合は、ノーベル賞を受賞された経済学者のハイエク先生でした。ハイエク先生が日本に来て講演をする時、渡部昇一さんは通訳としてずっと付き添っていました。ですからハイエク先生のもの考え方をどんどん吸収することが出来たわけです。ちなみに私が師匠と読んでいた木内信胤先生も、「私はハイエク先生に出会って初めて、世の中の見方を覚えた。ハイエク先生に出会わなければ、今の私はない」と言っておられました。ですから、人間にはどこかではっと気づかせてくれる良い出会いがあるものです。その出会いを上手に使うかどうかは本人次第です。

西郷南洲の漢詩をご説明しましょう。

**幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し・・・何度も何度も辛い思いをして、その度ごとに自分の志が固まって来た。**

西郷隆盛は3回島流しの刑にされています。そのたびに自分の人生を深く考えていったわけです。

**丈夫玉碎 輒全を愧ず・・・自分の命を全うせずに死んでしまうのは、恥かしい事だ。**

渡部昇一さんも戦時中、特攻隊が飛び立つのを見聞きしていたし、本当に玉碎した人も沢山いたので、体験的に分かって言っています。

**一家の遺事 人知るや否や 児孫の為に 美田を買わず・・・自分の一族にどういうことをしているか、誰も知らないだろう。子孫のために美田を買わない（財産を残さない）。**

西郷隆盛は「児孫の為に 美田を買わず（子孫に財産を残さない）」と漢詩に読んで、尚且つ、庄内藩の人たちに「自分がもしこの詩と違ったことをしたら、言う事とやる事が違う男だと思って良い」と言ったそうです。ですからこれは、本人が意識的にそういうつもりで書き残した文章だと私は思っていますが、ここが渡部昇一さんにすると引っかかったわけです。皆人間には欲があるわけで、家族に財産を残してやりたいと思うのが人情ではないか・・・という疑問を渡部昇一さんは一生涯持ち続けました。この本に答えは書いてありません。疑問のままで亡くなっています。

私も、この文章には引っかかりました。当時、大久保利通・伊藤博文・山県有朋らは私利私欲で動いていたから、それに対する反発があってこういう文章を残したのだと思いますが、本当に西郷隆盛が美田を残していないのか、氣になって調べました。

愛加那が住んでいた奄美大島に行ってみたところ、本人の意識と島の人の意識は違いました。西郷が鹿児島に戻ったあと、残された愛加那は西郷が買って残してくれた田畑を耕して自分が食べる糧を得ていました。一家が食べられるくらいの田畑を残したのであって、それは美田ではないと西郷は考えたのだと思います。しかし、当時の現地の人たちの感覚では、あれだけの田畑を持っているのは凄いことだったそうです。西郷が住んだ家も、本人からするとちっぽけな家なのでしょうが、当時の島の人から見たら豪邸なのです。良い悪いという言い方はしませんが、その人の立ち位置によって、人の評価は様々だと感じます。

私がここで申し上げたいのは、何か疑問を持ったなら、徹底的に追及することです。それを自分の身体に沁み込ませれば、解決するまでずっと追いかけます。解決しないまま亡くなる事の方が多いかもしれませんが、氣になったことをずっと追いかけて回さなければいけないと考えます。

ご紹介した『南洲翁遺訓を読む』は25年前に書かれた本です。『わたしの人生観・歴史観』は14年前に書かれています。『わたしの人生観・歴史観』は、渡部昇一さんが色々な形で発表したり書いたものを、編集者がテーマ別に分類整理したものだそうです。渡部昇一さんは、「自分は本当に嬉しかった。というのは、内容について変えなければならないものは何一つなかったからだ」と言っておられます。

我田引水で私事を申します。私は38歳の時に『警備保障のすべて』という本を東洋経済新報社から頼まれて出しました。今シムックスの現役に復帰して、改めて読み直しをしてみると、36年前に書いた本が、法律やデータは変えなければなりません、中身は変える必要がなかった。お客様が警備会社を選ぶ時の基準はこうなるとか、これから世の中はこ

うなるから警備業はこう対応しなければならぬとか、何より警備業は教育に始まり教育に終わるということを一貫して言い続けていました。ですから、自分が信じて書いた哲学に関する本は、知識の部分は法律が変わりましたから変わっていますが、自分のものの考え方は一切変わっていない。38歳の時と今と、まるでぶれていない。それは嬉しいなと思いました。

お時間が少なくなりました。では、恒例の質問をさらっとお聞きします。

- コロナが始まってから現在まで、主観的に見て良い日が続いていると思う方
- その間、嘘をついていない方
- その間、有難うと言い、有難うと言われている方

皆さん手が挙がりました。素晴らしいですね。次は身体の手入れです。これは2、3ヶ月でお聞きします。

- このところ、身体の手入れをよくやっている方
- このところ、自分を向上させるために日々努力をしているという実感をお持ちの方  
あくまでも主観ですから、ちょっとでもやっていれば、手を挙げられます。
- 昨晚寝る時に明日以降のことをイメージして、出来たと思って眠れた方  
だいぶ手を挙げる方が出て来ました。

最後に、テーマ「令和3年を考える」ですが、これから中間層はどんどん減って、貧困層は劇的に増えます。したがって倒産や自殺者が凄まじい数で増えてくると思います。同時に、金融資産1億円以上の富裕層がどんどん増えています。これはデータを取れば出て来ます。圧倒的大多数は、辛くて・苦しくてむごい年回りになります。ただ、対応の仕方ひとつで明るい未来が見える。そういう状況下です。すべて主観です。主観で動いて参りましょう。

お時間になりましたので本日はここまで致します。有難うございました。